

車の上を舞うような時期になっておりました。九月二十七日、ナホトカ港に着き、それで四日ぐらいたったかと思う。そこで検査を受け、十月二日、舞鶴に上陸したものでございます。

私を守ってくれた飯盒

千葉県 諸岡逸作

私は昭和十八年十一月七日大東亜戦争の為に召集を受け、三十歳の時、佐倉五十七連隊に入隊しました。

そして一週間佐倉にいて、すぐ満州第一一一部隊の駐屯する孫呉に向かいました。孫呉に着き汽車から降りてまず驚いた事はその寒さでした。見渡す限りの銀世界がまぶしいくらいで、ただ驚くばかりでした。ただちに第三機関銃中隊に編入されました。何しろ三十歳で入った初年兵です。ただ夢中でした。そして年が明けて十九年の正月三日だったと思います。戦争も激烈を加え三大隊に動員が下り殆どの戦友が勇んで出動し

ました。その時自分も一緒に行きたいと思いました。しかし残念ながら残されてしまいました。そして皆の出た後、間もなく師団通信に転属させられました。その頃は師団通信も平穩でした。そして毎日の仕事は師団のすぐ近くにある東風山に登り壕掘りでした。それから何日も経たないうちにソ連が参戦したとの情報が入って、間もなくソ連の飛行機が空襲に来了。機上の人が目に見える程低空だった。自分は此処で死ぬのかと思い夢中で逃げた。しかし戦争は何日も経たぬうちに終わった。

日本が負けた。そして白旗を上げた。その時の気持ちは何とも言い知れない感じだった。情勢は全く変わった。将校以下二等兵に至るまで捕虜となった。三日間歩かされ黒龍江を渡りブゴイに上陸、そして一日経って貨物列車に乗せられ七日間走って着いた所はピトロシーという地名だった。その寒さは孫呉よりも一段とこたえた。着るものはソ連軍のシュウバーだった。それでもまだ寒く感じた。

我々の仲間は約千人ぐらいたった。その千人が三隊

に分かれ洞窟の中で住むようになった。仕事は伐採だった。二人一組になって一日のノルマは、薪を二メートルの長さに切り一メートルの高さに積んで二メートルの奥行きに積むのが一日のノルマである。

しかし全員のノルマが上がらないと夜十時頃まで仕事をさせられる事が何度かあった。この伐採のために我々の仲間が何人か死んで行つた。全く気の毒でならなかった。

また、そこで一番困つた事はソ連軍の将校に大切な塩を盗まれたことだった。塩分が不足して体に力が入らず、物につまづくとすぐに倒れてしまい起き上がる力もなく、このままだと死んでしまうと思ひ我々の隊長にその事を話をした。隊長も驚いてソ連の事務所の方に話をした。その結果、ソ連軍の将校が盗んでいた事が判明し、それからは塩も充分支給され皆元氣を取り戻した。その時初めて塩の大切なことを知った。それからは片時も塩をはなした事はなかった。

そうこうしている間に伐採も終わり山を下りた。そしてハバロフスク第二十一分所に収容された。そして

毎日いろいろの雑役に使われた。

ある日、仕事を終わって帰る途中、突然ソ連兵のジープが我々の列の中に突っ込んで来た。

日本軍では四列縦隊で行軍するがソ連は五列で行進する。そのジープが一人、二人と倒し三人目の自分も何時の間にか倒されて前の車輪が自分の腰の上で止まった。その時、腰にぶら下げた飯盒がしかりと車輪を支えていた。もし飯盒がなかったらどうなっていたかと思うと、飯盒に感謝の気持ちでいっぱいです。

そして飯盒は今でも大事に使っています。

収容所生活で一時も忘れられない事は、帰る日の前の夜中頃の事である。全員起こされ「良く聞くように、今から名前を呼ぶ者はダモイの人です。明朝宮庭に集合して下さい。」との知らせがあった。そして自分の名前も呼ばれた。その時のうれしさは今も忘れません。そして昭和二十三年十一月七日帰宅しました。今でも元氣で仕事をしています。年も八十歳になりました。異国の地で亡くなられた戦友の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。